

---

# G H ～太陽は緑の大地を照らす～

直江 アキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GH 太陽は緑の大地を照らす

### 【Nコード】

N8561N

### 【作者名】

直江 アキ

### 【あらすじ】

NGH法が施行された遠い未来。水面下で様々な綻びが生じ、奇病が流行った二二〇八年の地球で――。

幸せを拒み、誰も信じられず、秘密を抱えた純血種（NGH）の少女。その少女を慕う、IDを持たない混血の無力な子供。幼い子供を懐柔し、全てを手に入れようと画策する、植物とヒトの融合体グリーン・ヒューマノイド（GH）の青年。

はたして望みを叶えるのは誰なのか？ この先の運命を変える者たちの出会いの物語。

## 序章（前書き）

某文学賞に応募したものを改稿しました。1〜2週間に3話ずつ程度の更新を予定しています。完結作品ですので途中で終了することはまずないと思われます。最後までお付き合いしていただけると嬉しいです。

## 序章

グリーン・ヒューマノイド  
Green - Humanoidは誕生時に光合成色素たる葉緑素が体毛細胞内に存在する者かつ実父または実母が先に該当する者とする。（NGH法第一条より一部抜粋）

中天を越えた太陽から燦々と光が降りる。

家路を急ぐ娘はその降り注ぐ陽光の反射を感じ、立ち止った。

当に手入れを忘れられた街路樹の脇の壁、当たり前のように貼られたポスターに——それは政府によって配信される薄型フィルム式電子ポスターだった——じりじりと身を焦がした。

……取り払って棄ててしまおうか？

暗い欲望が娘の中で頭を擡げる。

ポスター自体は特に変わったものではない。むしろ生まれて十七年間で見慣れたものである。

年に一度、毎年決まってこの時期に配信されていたのだから。今はどこもかしこも薔薇と、蔦を模した紋様と、影絵のようなシルエツトだけの細身の男が幅を利かせている。何の変哲もないこのポスターが使われるようになったのは娘が生まれる遙か以前で、奴らの生誕記念を謳うものだ。

ただ彼女には——世界でたった一人、彼女だけには、それを憎む

明確な理由が二つあった。

ひそめられた、平素はなだらかに稜線を描く眉は歪み、そしてやはり通常は涼やかな黒い切れ長の瞳は苛烈なものを宿していて不穏だ。

足元に落ちた濃い影を忌々しそうに踏み、次いで太陽を振り仰ぐ。

白光を浴びて娘の黒髪はただ、微かな熱だけを蓄えていた。

## 序章（後書き）

読んでいただきありがとうございました。およそ10年前に構想し、こつこつと迷路にはまりながら書いた作品です。未熟な部分もあるかと思いますが、続きを読むだけでいただければな、と思います。また誤字脱字のお知らせや感想等は泣いて喜ぶ予定なので… よろしくお願ひします。

## 第一章「世界の大規模な変化」（前書き）

冒頭に残酷な描写あります。ご注意ください。

## 第一章　世界の大規模な変化

少女が横たわっている。

ごみ溜めのような汚い場所だ。人氣のない場所。

虚ろに開いた瞳はすでに光がなく濁りきっていて、色褪せ汚れたワンピースから、骨と皮ばかりの枯れ枝のような手足がのぞいていた。ごわごわとした黒い髪はざんばら、靴はない。もしかしたら僅かに息が残っているかもしれないが、それはどうでもいいことだ。

手が伸ばされる。少女を動かすと僅かに蠅がブーンと唸る。死臭が鼻につくが手を止めることはない。

密やかに笑う声がある。

ねえ――。

アン姉<sup>ねえ</sup>ってば――。

「起きろおっ！」

揺り返し、繰り返し、その声と身体の動きで夢から現実に戻ったアン・ハーネットは顔を顰めた。

余り良い夢ではない。

ただ、覗き込むレモンイエローの瞳に笑顔を向ける余裕はあった。

「おはよう、キーラ」

子供は短い金茶色の髪を振って溜め息をついた。

「……おはよう、じゃないよ。遅刻するよ、アン姉」

そのどうしようもないというような態度に即座に状況を把握し、アンは飛び起きた。

——今何時！？

窓のカーテンはわずかに開けられ、そこから日が差し込んでいるものの、ビル群に囲まれたここではそれが朝の何時頃なのか正確に把握出来ない。

「……四時五八分、遅刻まであと三十二分だよ」

あたふたと服を着替える彼女にキーラは時刻を正確に告げて、動線を刺激しないように脇に退く。

部屋を右往左往し、首にID——NGH法によって指定されている姓名及びNGHナンバーの記載された非金属プラスチック性のプレート型ペンダント——と父親の形見のネックレスをかけ玄関に突進したアンはふと立ち止まり、子供を振り返った。

「鍵かけて、誰か来ても開けてはだめだし、外も出てはいけないわよ！ カーテンも——」

「閉める。わかってるから早く行った方がいいって——行ったらっしやい」

妙に釈然としないまでも、アンは自分が遅刻しそうなことを思い出し慌てて家を出た。

——間に合った！

ほっ、と息を吐いて、開店の音楽に合わせ息を整えていると、客が入店する。

黄緑の髪を会社員らしく七三に分け、銀縁眼鏡の奥は淡い水色。スーツは味も素っ気もない濃紺シングルボタン。にこやかに応対し、いくつかのボタンを押したアンは、機械から出されたプレートを渡す。

朝靄も消えない時間だが客は途切れない。すぐに次の客が前に並ぶ。女の青緑の髪は見事に巻かれ、綺麗にはかれた口紅が燃えるようなオレンジの瞳に負けていない。

「モーニングセット、コーヒーで」

「かしこまりました」

マネーカードをシステムに翳した女に、やはりにこやかにアンは対応する。湯気の立つオムレツの載ったプレートを渡し、女が踵を返した瞬間だけ、張り付かせた笑顔を引っ込めた。

仕事はまだまだ始まったばかりで、次々とやって来る緑の髪をした客に心中で溜め息をつく。笑顔を固定したまま、アンは昼過ぎを心待ちにしていた。

西暦二二二七年、環境是最悪だった。

世界規模へと広がったオゾン層の破壊。

二酸化炭素濃度上昇と緑地伐採や砂漠化における地球温暖化現象の激化。

極地付近の氷や山岳氷河の融解による海面上昇と低地の水没、海流の変化。それに伴う数々の異常気象。

二十世紀末から危惧され続けてきた地球の様々な環境破壊——それが現実のものになったのだ。

特に、二酸化炭素濃度の上昇は、地球の存続すら困難になるのではないか——と方々で懸念されていた。

被害を受けたのは植物である。

伐採され、人の手が加わった森など、すでに機能しないといつても過言ではない。環境保全が叫ばれてから僅か百数十年——地球上の植物は激減、絶滅してしまった種は多数となった。数え上げればきりが無い程。

二十世紀以前のような楽観的な考えを持つ者は少なくなり、皆大なり小なり不安を抱えていた頃。太平洋に浮かぶ水没間近の島国のある博士が造り出したものは画期的だった。

それで地球は生き返る。

まだ繁栄を謳歌出来る。

そう、誰もが期待した彼の研究。拍手と喝采と高揚感を持って迎えられた彼の発明品。

それは——遺伝子工学と植物生理学の結晶たる、ヒトと植物の細胞を融合させた、光合成の可能な生物。

グリーン  
グリーンの ヒューマノイド  
Green - Humanoid。

その通称をGHジーエイチと言う。

形はヒトと変わらない。違いはその髪の色。地球上で幻となりつつある、鮮やかな——緑。

その特異な毛髪の色は細胞内に光合成色素——葉緑素を持つ為で、太陽光や一定以上の光源により光合成を行い、通常の植物と同じく二酸化炭素を取り込み酸素に還元する。紅や桃色、橙や黄色、白と、ヒトのようにメラニン色素量で決定するわけではない様々な虹彩は元になった植物の花弁に由来する極彩色。

決して、純粋なヒトにはないもの。

それから、地球上には爆発的に『緑』が増えた。

環境悪化を阻止しようとしていた世界政府は公然と倫理を無視。

地球議会公認の元、莫大な研究費を費やしその発明の数は増加した。

当初、ヒトは自らをPure HumanもしくはP<sup>ヒューマン</sup>Hと呼びG<sup>グ</sup>Hを蔑視していたが、その数が無視出来ないものになるにつれ、脅威を覚える。

発明から百年も経つと地球議会も様変わりし、G<sup>グ</sup>Hの代表議員が過半数を超えた。

これらヒトの衰退については、婚姻等のG<sup>グ</sup>Hとの融合説や、AI化された社会に適合し弱化したことが原因である、と諸説あるものの、減り続けた彼らを守る事は地球議会では議論されず、隠れた絶滅危惧種となる。

その地球議会で始めて議論されたヒトに関する法律がNon Green Human法——所謂NGH法であつた。

施行後、ヒトの生活は一変する。

わかるだろうか？

何をするにも、どこへ行くにも、管理課の許可を要し、いわゆる人権などというものは、ヒトには認められなくなった。ヒトは驚愕する。が、抗おうにもヒトは力弱く、数も少ない。

……ただ従うしかなかった。

古い法である。

今、この地球はGHによって歴史を紡いでいる。法は何度か改定されたが、基本理念は変わらない。

いくらヒトが神の真似事をして造り出した人類の亜種とはいえ、優れた種が生き残ることは、進化の歴史を鑑みても当然のこと。ヒトよりGHが優れていることは、能力の上でも地球にしたことを考えても、一目瞭然で。

だが、それをわかっていてもヒトは呪った——木坂健二郎を。

GHの創造主、遺伝子工学と植物生理学の権威であつた博士は、彼自身最大の発明をもって地球を救い、同族を見捨てた裏切り者だと言われている。

西暦二三〇八年、地球は変わっていた。

## 第一章 くくれんぼの鬼

——どうして!?

いるべきはずの子供がいない。

キーラは生まれた時から彼らに近い環境にいた為か、GHに対する警戒心が希薄だ。

もしも、管理課に見咎められたら——そう思うと、アンはいてもたってもいらなかった。

仕事から帰ってきて、部屋の鍵が開いていたことを不審に思っ、それでもまさかキーラが中にいないとは考えられなかった。けれど子供はどこにも姿がない。

先程から大声で呼んでいるが、反応は全くなかった。

以前、やはり姿が見えなくなった時、キーラは一人『かくれんぼ隠れ鬼』をしたまま戸棚の中で眠っていたのだが、そのどこを捜してもいない腕が通るか通らないかの隙間すら捜し、アンはやっとそれに気付いた。

ちょうど外が覗ける幅に、カーテンは開いていた。そこは一日を通してぴつちりと閉めてあるはずだ。

廃墟となったホテルを利用した賃貸住宅の、窓にかかった所々が破れたカーテンのその隙間から、中天を越え西に沈もうとしている橙色の光が差し込んでいる。

アンは隙間から外を覗いた。

雑多に並んだ、色の煤けたビル群——それはとうにGHにとって役目を終えた建築物の墓場で、その上に午後の眩しい太陽が陣取る。

視線を下に動かすと、もう本来の機能はなしてはいないだろう、錆びた転落防止の柵が腰の高さまで。その先、ほぼ真下、ビルの狭間の暗い場所に目的のものを発見し——次いで目を見張った。

小柄な、金茶色のふわふわ揺れる短い髪。捜していた子供の横に、人の姿がある。

四階からでも間違えようがない。

あれは、黒や茶色の髪ではない。

濃い緑——ビル群が作り出す日陰でも保てる強い色彩。

GHの、木坂健二郎の造り出したヒトの変異種の、その人工的な色。

——キーラ！？

上から覗く限りはそのGH、子供に危害を加えている様子はない。だが、彼——彼女でなく彼だろう——彼が、管理課の者ではないという保証はない。

——いいえ、多分違うはず。

アンはすぐに己の考えを否定する。

管理課は一目でそれとわかるような、味も素っ気もない濃紺のスーツを着ている。対して眼下のGHが身に着けている物は明るい水色のシャツで、そのカジュアルな服装から鑑みるに、恐らくこの廃墟群——NGH居住地区——に入り込んでしまったGHだ。

最悪の事態——キーラの收容を免れたことで、アンはふっと息をつく。

ただ通報される可能性は捨てきれなかった。今でもヒトを苛めて喜ぶようなGHは沢山いるし、通報はせずとも売り飛ばされてしま

う子供は少ないのだ。

見過ごすことも、見捨てることも出来ない。

キーラは、血は繋がらなくとも、アンにとって唯一の家族だから——彼女は踵を返した。

非常用階段を一足飛びに駆け下りる。

途中、同じようにここに身を寄せる住人と擦れ違う。平素は気になるそのしかめられた眉も、今はどうでもいい。

古い、鈍く光る細い鎖がカチャカチャと鳴くネックレスがもどかしい。先についているチャームは丸いコイン型、九枚の細く長い葉が刻印された彼女の唯一の装飾品とIDが速さと衝撃で肌にぶつかる。微妙な不快感に服の上からそれを握り締め、アンは全力で駆けた。

最後の三段を飛んで、一階の踊り場に勢いよく着地する。

体勢だけは既に走り出していた為か、膝は衝撃を吸収しきれずに嫌な音を立てる。けれど、痛みはちらと頭をかすめただけで、すぐにキーラの無事を祈った。

踊り場からはぐるりと九十度廻らねば外の様子——キーラのいる位置は見えない。

どうかまだそこにいるように、と祈りながら、その角度を前方を確認せずに曲がった。

速度と、遠心力と、逸る気持ち相まって、壁にでもぶつかっただけのような衝撃を受け、転ぶ！——と思った瞬間、強い力で引き戻される。

濃厚な香りが広がる。  
馥郁たる匂い。

ダイレクトにそれを感じて一瞬がとても長く感じた。

アンの視界が揺れ、世界が不安定になる。

それでも何とか自分を取り戻し、最初にピントが合ったのは、少し先でレモンイエローの瞳をまんまるに見開いたキーラ。

次いで、視界の端に彩る真紅。

それは、赤よりなお濃い、紅の虹彩だった。

自分の二の腕を掴んでいる存在。濃緑色の髪、それは夏の木漏れ日の下で見る葉の色。

眉間に一筋入ったしわと盛大にしかめられた眉。だが、それらを補って余りある印象的な顔立ち。年の頃は二十歳をいくつか越えたくらいか。女にしては長身のアンより頭一つ分高い。

「……誰だ？」

声も出ないまま、まじまじと見上げる彼女に、GHが口を開く。  
それ

「彼女がそうか？」

キーラが言葉を発することなく、まだ驚いたように瞳を見開いたまま、こくこくと頷く。

途端に、アンは妙な動悸がした。

「あなた……誰？」

それは喧騒の中では消されてしまうような細い声だったが、この静かなビル群の狭間ではやけに大きく響いた。その反響になぜか

少しだけ勇気付けてもらって、今度はしっかりと声が出る。

「何をしているのキーラに！」

掴まれた腕が炎にでも炙られたかのように熱い。飛びのくように振り払ってGHを睨んだ。髪がビル風に煽られて鬱陶しい。翻る黒い糸束と、慌てたようなキーラの仕草が視界の隅に入る。

GHが瞬きを一度してキーラとアンを交互に見た。

「……その子には、キーラには何もしていないさ。俺はただ、捜し物をしていただけだ」

彼女の剣幕に、何にもされてないよ、と遠慮がちにキーラが告げる。アンはそれでも青年から目を離さない。

「俺はレニー・アルソン——君は？」

にこりと笑った顔は眩しいくらい邪氣がない。

声も穏やかで、それが逆に怖かった。

——名前を明かす必要があるの！？

徐々に眉間にしわが寄る。その射るような視線にレニーが苦笑した。

「そんなにカリカリするようなことじゃないだろう。別にIDを見せろって言ってるわけじゃない。ちょっと聞いたただけだ……君がキーラの保護者なのか？」

ギクリ、と動揺する。

その動揺がさらに動揺を呼んだ。恐れていたことが起こるかもしれない。

頭のどこかで警鐘が鳴る。

キーラと共にいたGHの、アンに投げかけるその意味ありげな視

線と問い。

レモンイエローの、何故か双方を氣遣う瞳。

どうやら、彼女のいない間に交わされた会話がある。それが何なのかわからないけれど、少なくとも好ましい話ではないとアンは思う。

G Hの質問から簡単に導き出せる答えに愕然とした。

——キラの父親！？

キラは混血だ。

レモンイエローの明るい瞳とそれよりも濃く暗い色をした金茶の髪。

その子供がN G Hの母親を探している事は重々承知していた。だが彼からG Hの父親の話は聞いたことがない。話をするつもりがないのか、それとも知らないのか、アンには判別できなかったが、G Hが髪に葉緑素を持たない混血の子を迎えに来るなど考えてもみなかった。

そこに一瞬で至ったアンは、それはないか、と自分の考えを否定する。二十代前半と思われる青年が、七つを越えたばかりのキラの父親であるとは思えない。それに——瞳の色がまるで違う。明るいレモンイエローの瞳とは相容れない、真紅。

父親でなくとも血縁者なのだろうか。その花に多数の色がある場合、そういったことも考えられる。だが、本来一親等である親は大幅に同じ色をしているものだし、近しい親戚だってそうだ。

けれど保護者の確認など、他になんの為に聞く？

管理課のG Hがもしも私服で捜査するならば、IDを提示させN G Hナンバーを確認すればいいだけの話だ。

レニーの言った、捜し物、という言葉が胸をえぐる。それがキラでない保証はない。

「あなた何者？」

彼を直視出来ず視線を逸らした。唇を噛んで、下を向く。

「俺はB R C——」

「レニー、アン姉を苛めたらだめだぞ」

彼の言葉を遮って、キーラがアンを庇うように前に出た。

ところがその声は真剣なものではなく、むしろ悪戯をした兄弟に對するような響きであり、レニーとの間の柔らかい空気をかえってアンに見せ付けただけだった。

キーラが人懐こい子供であるとはいえ、アンは確信を深める。十中八九、捜し物はキーラだ。多分、レニーはキーラの父親の血縁者か、知人か、または探偵か何かその類の職業だろう。

けれど——キーラを渡すわけにはいかない。

「帰って！」

バチンツ——と耳に痛そうな音が狭間に響き、真紅を見開いて青年は頬を抑える。

彼の頬はゆるゆると赤くなり、しまった、とアンは恐怖から一歩退いた。

「俺は何故叩かれたのか聞いていいか？」

しかし、彼はどうしたことが怒った表情はない。声音もそのままだ。

普通、よく知らぬ相手に叩かれて——ましてや見下しているNGHに危害を加えられて——こうも冷静でいられるものだろうか？  
すぐさま管理課を呼ばれても仕方ないこの状況で。

アンは不安からキーラを抱き寄せ、彼を見上げた。その顔に少しだけ後悔が現れる。

「レニー、だいじょぶか？」

キーラが自分の腕の中で、彼を親しそうに心配した。

「ああ、大丈夫」

——なんでGHを心配するの！？

アンは彼を見つめたまま、ぎゅっとキーラを抱きしめた。

レニーはそんなアンとキーラを交互に見て、一瞬首をかしげるような仕草を見せた後、踵を返す。彼がビルの隙間から見えなくなるまで、視線を外さなかった。いつこちらに駆け戻ってきてキーラを連れて行ってしまうかもしれないと思うと。

だが、レニーは何度かこちらを振り返ったものの、戻ってくることはなかった。

## 第一章くくれんぼの鬼（後書き）

次回の更新は来週の土日を用意しています。ここまでお付き合いしていただきありがとうございます。

## 第一章　澱のような不安

「キーラ……部屋に戻るよ」

幾分低いアンの声に、腕の中でキーラが身を竦める。

「ねえ、やっぱりオレのこと怒ってる？」

子供の手を握る。促すように足を出し、彼女たちは踊り場をぐるりと迂回して階段を昇り始める。見上げてくるそのレモンイエローの瞳が不安に揺れていた。

「ごめん」

——どうして外に出たの？　一年も約束を守っているのに。

外で遊びたい年頃だろう、とは思っていたが。傍らの子供に視線を落して、眉尻を下げる。

アンの視線を正確に受け取ったのか、ポツリとキーラが呟いた。  
「カーテンを開けて外を見てんだ。どこかに見覚えのあるビルと  
か見えないかと思って。そしたら、下にレニーがいて。オレの顔を  
見て驚いてるから声をかけたら——」

「声をかけたっ？」

思わず出た大きな声は非常階段に小気味良いほど響いた。キーラ  
がそれに首を竦める。

アンは浅くため息をついた。だとしたら、部屋の位置も覚えられ  
ている可能性がある。

「……引つ越そうか？」

「嫌だっ！」

突然の声と共に、キーラが手を振り払う。その声は何度かこだま  
した後、反響を残して収束する。その予想していた答えに今度は深

くため息をついた。

「あのGHが通報したらどうするの？」

「オレがこのあたりから違うところへ行っちゃったら、母さんがオレのこと見つけれないかもしれないじゃないかっ！」

「通報されちゃったら終わりなんだよ！」

アンは少年の目線の高さまで腰を屈め、囁んで言い聞かせる。それで、キーラが納得してくれるものとは彼女も思っていなかったが

——案の定。

自信満々に笑うキーラ。不敵に煌めく瞳が実に子供らしい。

「大丈夫っ！——レニーは管理課に通報しないって言ってたし、口止めもしたよ」

それ、信用出来ないんじゃない——という言葉を飲み込んで、アンは身体を起こした。その様子にキーラが慌てる。

「ホントだってば！レニーに聞いたんだ、通報するかって。アン姉、いつも気にしてるから……そしたら言わないって言ってくれた」

見上げるそのレモンイエローに先程までの不安な色は見当たらない。確信の色、レニーを信頼する気持ち溢れていた。

結局、アンはキーラに弱いのだ。子供の望みなら叶えてあげたいと思う。だから。

「……わかった」

「ホントかっ!？」

小さく頷いたアンに、キーラは嬉しそうに階段を駆け上がる。汚れて、ツギの当てられた膝丈の半ズボンが視界に映った。その子供の動きを強い言葉で引きとめる。

「でも！知らない人には——GHでもNGHでも、気をつけないといけないからね！」

——誰も信用出来ないんだから。

一瞬首を傾げたキーラが神妙に頷くのを見て、アンはやっと憂い顔を解いた。そうして再び跳ねるように階段を昇るキーラの後を追う。

くるくると廊下を廻りながらキーラは『五〇二号室』とプレートがついた部屋の扉を開く。

嬉しそうな子供の様子に、アンは薄く嗤って一抹の不安を押し殺した。

「昨日みたいに誰かが来ても外に出ないでね。窓から手も振っちゃいけないよ?」

軋む扉のチェーンの下から覗くキーラにそう声をかけた。

子供が頷く。もう一度だけ念を押し、行ってきますと言って扉を閉めた。

くるりと体勢を入れかえて、うーん——と伸びをする。

——さて……仕事、仕事。

階段の前には二人の人影がある。

彼らはアンを見るとあからさまに嫌悪の表情を浮かべ、視線を外した。

いつものことだ。

アンは二人の横を通り過ぎる。ぼそぼそと囁く声は聞こえるが、聴いて良い気分になった試しがないのでこれも無視した。しかめられた眉も視界に映るが、いちいち深く気にしては身が持たないことをこれまでの人生で学んでいる。

カン、カン、カン、といかにも金属的な音を立てて階段を降る。職場までは徒歩で二十分程。まだ宵闇の視界の悪い中、明けていく

空を眺めながらてくてく歩く。

廃墟の町並みが公共施設のそれに変わったところで、アンは下を向いた。いち、に、と交互に視野に入る自分のつま先を数えながら店に向かう。

目立っても何の特にもならない。同じように向かう人々はGHもいるし、NGHもいる。だが、背筋を伸ばし思い思いに挨拶を交わしたりして足早に駅に向かうGHとは対照的に、NGHは皆大抵が下を向いてとぼとぼと歩いていく。

九割以上機械が働く職場の従業員は少ないが、人件費の関係かNGHが多かった。

そんな中でもアンは必要事項以外は誰とも好んで話さない。

NGHは彼女の存在を忌み嫌っていて嫌がらせ以外では側にすら寄ってこないのだ。それは彼女の容姿が多分昔で言うアジア系であるからなのだろう。GHも必要以外はNGHに話しかけはしないから、職場でほとんど口を開くことはない。

そういえばGHと仕事以外で話した事は久しぶりだ、と彼女は忙しなく手を動かし、笑顔を張り付けたまま頭の隅で考える。

レニー・アルソンと名乗った青年——緑の髪は短く濃かった。露を纏った大輪の花を思わせる印象的な真紅の瞳。細身の身体に、着崩したラフな格好——水色のシャツに黒のジーンズ、一体いつの時代のものか、博物館にしかないようなレトロなスニーカーを履いていた。優しそうな雰囲気も、粗野ではない所作も、いかにも女子供受けしそうな青年。

けれど愛想の良い話し方も人懐こい笑顔も、アンには警戒心を抱かせた。自分にとって、周囲は——GHもNGHも——牙を向くだけの存在だったし、警戒せずに話すことが出来るのはキーラだけだ。

脳裏に、何度も振り返りながら去っていった彼が鮮やかに浮かぶ。昨日はつい、キーラを連れて行かれるのではないかと逆上し、頬を叩いてしまった。

——彼はあそこに何の為にいたの？

捜し物とはやはりキーラなのだろうか。

もう少し落ち着いて話を聞けば、今こんな風に悩むことなく済んだかもしれない。

——まさかまた来ないよね？

不安が胸をよぎる。あれだけ念を押したのだ。キーラもまさか今日は外には出ないだろう。

普段は客がない場合、暇をもてあまし気味だがこういう時には都合がいい。誰も話しかけてこないから、考える時間はたっぷりとある。

ピーと機械音が響き、スーブの残量がゼロに近づいたことを知って、補充のためにアンはカウンターの裏手に回った。裏側には、機械の機動部分がある。そのいくつかのチューブを外しては接続し、スイッチを入れ替えた。ガチン、ヴーン……と極かすかなモーター音と共に、アンの目の前にある太いチューブの中を液体が降下していく。それを上の空で見つめながら、アンの意識は再び考えに没頭する。

——何者だっただろう、彼は。

管理課のGHではない、絶対に。彼らはまず間違いなく最初にNGHナンバーを確認して、携帯端末から情報を引き出し照合する。だが彼は二人のIDに興味を示すことはなかった。

——BRCって、あのBRC……？

BRCは言わずと知れた巨大な財閥だ。けれど、その社員には見えなかった。サラリーマンならあの時分ラフな格好をしているとは

思えない。

かといって、迷い込んだわけでもなさそうだ。

二人に注がれた含みのある視線。探している物の行方を、確実にあの周辺に当たりをつけてやってきたのだろう。とすると——やはりキーラの父親関連なのだろうか。

勝手に追いつたりして悪かったかな、とふと考えた。

アンは家族だが、キーラの幸せは自分と共に暮らすことかと問われると素直に頷けないものはある。時折鳴る子供の腹の虫が満腹に程遠いことをいつもアンに教えていた。

少なくとも、自分というよりは満足に食べさせてあげることが出来るはずだ、GHなら。

ゴウン——とその時、音がした。一瞬、それに気をとられ思考が拡散する。どうやら第二段階に入ったらしく、次のエリアの機械に液体は吸い込まれていく。アンはそれを見上げ、機械の液晶部分の数値をチェックした。

ほうつと息をついて、再び流れてくるスープに目を運び、思考していたものを手繰り寄せる。そして手繰り寄せて早々、己の考えを打ち消した。

——キーラはお母さんを探しているんだもの！ あんなGHの、ましてや身重のお母さんを放っておくような薄情な父親の元になんか行かないほうがいいわ！

やっぱり断固拒否しよう、と一人ごちて、アンはカウンターに戻る——はずだった。

ドンツと肩を押されなければ。

——何するのよっ!？

一瞬怒りが先に立ったが剣呑な気配を経験から隠し、乱暴を働いた相手を見据えた。

「アタシはね——嫌いなよ、黒髪」

小突いたのは同僚のジェシカだった。

彼女はカールした長い金髪を細い指先で弄びながら、もう片方の手に持ったエプロンをくるくる回した。立ち姿は堂々としていて、女でも惚れ惚れするほどのプロポーション。灰青の瞳が酷薄な色を浮かべている。

店の者には大抵無視をされるか、あっても陰口を叩かれるかぐらいで、その中でジェシカだけがアンに突っかってきてはいたけれど、それでも小突かれたことは初めてだった。

だが、またか、とアンは軽く息を吐く。

「辞めなさいって何度も言ってるでしょ？ こりないね、あんた」

——そんな脅し、慣れっこだもの。

まだ両親が存命だった頃もその後も、アンは血筋と容姿で虐げられてきた。無視や陰口だけではなく、小突かれることなど日常茶飯事で生ごみを投げつけられたことも一度や二度じゃない。友達と呼べる相手もいたことはなかった。数年前は月に一度口を開けばいいほうで、今でも話すことは得意ではない。

だから、絵に描いたような典型的なNGHにアンは溜息を吐いたのだ。それを耳聴く聞きつけて、ジェシカの眉間にしわが幾筋も寄る。

「……あんたの見た目がみんな嫌だから、アタシが代表して言っただけじゃない！——その黒い髪、若い頃のあいつにそっくりの色。それだけじゃない、その真っ黒で気味悪い瞳。あいつと一緒にで見るのも嫌っ！」

——馬鹿みたい。

世界にアジア人の容姿を持つN G Hは少くない。それら全部に威嚇するつもりなのだろうか。噴飯ものだが、しかしそういうN G Hが多いのも事実で、アンは天井を仰ぐ。

「……この店を辞めるつもりはないから」

ゆっくりとジェシカを見つめる。金の髪に灰青い瞳。整った顔立ちで、G Hなら女優かモデルにでもなれるだろう。でも彼女はN G Hだ。

「この髪も目もあたしが望んだものじゃない……あんたは違っの、ジェシカ？」

それに怯んだジェシカをもう振り返りもせず、アンはカウンターに戻った。

## 第一章　澱のような不安（後書き）

一週間ぶりです。今週は時間の都合で一話のみですが、来週は金曜日に会い出来と思います。次話もよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8561n/>

---

GH～太陽は緑の大地を照らす～

2010年10月15日00時11分発行